

「虚学」にいまできること —— 不安の克服と「病草紙」

永井 久美子（進学情報センター）

進学選択に悩む学生の進路相談に応じている中で、これまでに何度も尋ねられてきたことの一つに、人文学は何の役に立つのか、という質問がある。文学や歴史、芸術に興味はあるが、専攻した場合、就職の際に不利になることはないか、という不安を聞くこともあれば、実学以外に意義を見いだすことができない、という意見を聞くこともある。

そのようなとき、抽象的な話をするよりも、教員自身がなぜ人文学を学ぶのかを具体的に話した方が納得してもらえることが多い。一言でいえば、やはり好きだから、ということが動機となるのだが、自分の研究がどう社会に貢献できるのかという問いには、学生の頃から今に至るまで、筆者も向き合い続けている。

たとえば、昨今の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）関連の報道に接するにつけても、人文学を専攻する自分に何ができるのかを、日々考えさせられている。拙稿の紹介となるが、「暴露の愉悦と誤認の恐怖——「病草紙」における病者との距離」という論文を、2018年に発表する機会があった（牛村圭編『文明と身体』（臨川書店）所収）。平安期の絵巻物を研究する者として、感染症関連の報道からまっさきに想起したのは、「病草紙」という作品であった。

「病草紙」は、12世紀末、後白河法皇（1127～1192、在位1155～1158）のもとで作られた絵巻とみられている。現在は段落ごとに切り離され、21段が各地の美術館等に分蔵されている。筆者も企画に参加した加須屋誠・山本聡美編『病草紙』（中央公論美術出版、2017年）に、高精細印刷による全場面のカラー画像が掲載されていることを紹介したい。

「病草紙」の内容は、各種の症状をまざまざと描出し、病者に好奇のまなざしを向けるものである。絵巻には治療を施す医（くす）師（し）や介抱する者も登場するが、病者を指さす者やあざ笑う者がより多く登場する。絵巻の制作当時、「健常者」たち

が病者に対し、差別的な姿勢をあからさまに示していた様子を読み取ることができる。

絵巻を作らせ鑑賞した貴族たちにとって、みずからの社会の内部に病者を侵入させないことが肝要であった。伝染病の場合、感染拡大を防ぐための対策は必要なものである。しかし平安貴族たちの排他性は、「健常者」たちの社会を守ることを目的に、罹患者たちに対する差別意識を含んでいる点に問題が認められる。新型コロナウイルスの感染に関しても、感染者狩りとでも呼ぶべき差別的な発言や行動が各地で認められたことを考えると、病者に対する平安貴族たちの排他的な感覚は、過去のものとして払拭しきれていないように思われる。

病の感染を怖れる人間の不安の本質は、時代を問わず普遍的なものであるのだろう。だからこそ、過去の例から教訓を学ぶことができる。黒死病の蔓延する社会を描いたカミュの『ペスト』やマンゾーニの『いいなづけ』がいま注目されるのは、伝染病の流行にあたり、混乱にどう対処すべきか、困難をどう克服できるかの叡智を求めてのことであろう。『ペスト』における災厄の終息を祝う花火の描写には、今回のコロナウイルス禍にも終わりがくることの希望を見いだすことができる。古典を読むことを通して、不確かな世論に翻弄される人間の姿を客観視し、長期化する不安の中にあっても理性を保ち、精神を疲弊させずにすむ方法を学ぶことができる。「病草紙」もまた、病が引き起こす社会不安のあり方と、繰り返されるべきではない差別の残酷さを知る素材となり得るものである。

コロナウイルス問題に人々が閉塞感を感じている理由の一つとして、現時点では罹患の正確な判別が難しいことが挙げられる。病者が容赦なく嘲笑われることの多い「病草紙」において、周囲の人々が困惑の表情を見せるのは、「居眠りの男」と呼ばれる段である。過眠症とみられる症状を取り上げた段であり、「生（なま）良家なる男」と記される男性が、人前でも居眠りを繰り返す様子が描かれている。これは、少しばかり良い家柄で、貴族社会に一応属する者が、「健常者」のように見えたにもかかわらず、接してみると病を有していたことに対する困惑である。

病者を判別できないことへの不安は、病が疑われる者の患部をよく見えるように示す発想にも連なっている。「病草紙」には、「小舌の男」や「息の臭い女」のように、口腔内にトラブルを抱えた者が大きく口を開ける姿や、「霍（かく）乱（らん）の女」「二（ふた）形（なり）」のように、臀部や陰部をさらすことで「病状」を示す例が複数認められる。外からは見えにくい口腔内や、衣服で通常は見えないことのない肛門や性器を描き出すことで、隠れて分かりにくい特質を知り、「健常者」と判別のつけがたい者たちの「正体」を暴くことが、「病草紙」では好奇の視線を孕みつつ行われている。

「眼病治療」の段には、白内障とみられる症状に悩む男が、医（くす）師（し）と名乗り現れた男を「然るべき神仏の助けかと思ひて」家に呼び入れたが、治療が失敗に終わり片目を失明する様子が描かれている。小刀を目に突き立てられ出血するさまは、グロテスクな絵が苦手な人には刺激の強い絵であるだろう。一方で、怖いもの見たさの対象にもなり得るようで、絵巻の画面中にも、隣室の襖の陰から治療のさまを覗く者たちが描かれている。

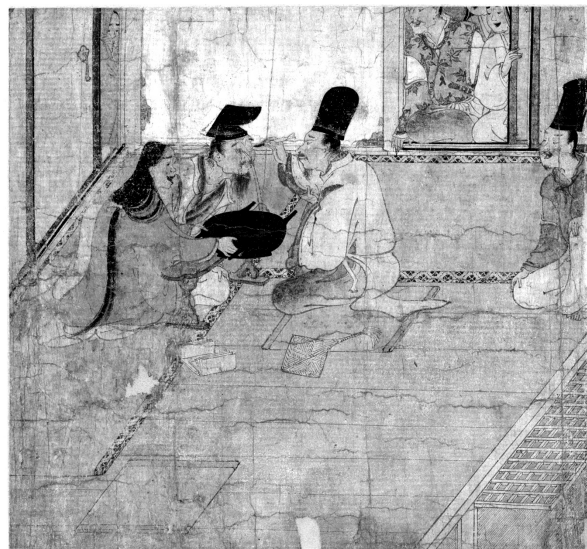
治療や介抱を描くのは、「病草紙」においては、病状の改善のためというよりも、患部を暴き出す意味を有している。その中で眼病治療が描かれていることの意義を改めて考えると、人間の体にある穴を示す九（きゅう）穴（けつ）、九（きゅう）竅（きょう）（両眼・両耳・両鼻孔・口・後陰・前陰）という単語があるように、眼もまた人体における穴の一つであり、その奥を覗き込み、不調の原因をつきとめようとした顛末を描いたものとみなすことができる。

眼窩は瞼で閉ざすことができる箇所であり、また外観からすぐに識別できる眼病は、素人には限られている。「病草紙」での眼病治療は失敗に終わっているが、近代以後、眼底カメラのほか内視鏡、そして顕微鏡などの開発により、人体は細部、深部まで可視化が進んだ。肉眼では見ることのできないウイルスも、拡大された画像が連日のようにメディアで取り上げられている。出歯亀的な趣味があるものの、隠れた患部を明らかにしようとする「病草紙」の方向性は、医療の発展と無縁とも言い切れない。病の原因や病状を可視化したことは、その先に行うべき

対処をより具体的に検討することを可能にした。「病草紙」は、見方によっては病に対する不安を克服するヒントも与えてくれている。

「病草紙」には、病により「交じらぬ」、すなわち人と人との交際に支障をきたすことこそが問題であると複数の段に記されている。「健常者」たちの均一化社会を乱す意味と単純に同一視すべきではないが、人が集えなくなることの問題は、まさに今日、大学でも発生している。病による分断を乗り越え、「歓喜の歌」を歌い上げられる日が近く来ることを願ってやまない。

自分の専門分野にひきつけて、進学相談の中で学生から受けた質問を発端とし、昨今の情勢について思うところを記してきた。魅力的であるはずの人文学が「虚学」と呼ばれてしまうことがあるのは、実社会の課題とどう結びつきうるのかが必ずしも自明ではないことによるだろう。しかしそれは、どのように社会に結びつけるかを一人一人が考え、選び取ることができる学問であることも示している。コロナウイルス禍という新しい問題に対しても、人文学にできること、人文学にこそできることがあると信じている。



「病草紙」より眼病治療

縦 26.2 × 横 58.9cm 京都国立博物館蔵
国宝 加須屋誠・山本聡美編『病草紙』
(中央公論 美術出版、2017年)より転載